

論文内容の要旨

氏 名	梅 茹茵
論 文 題 目	日中同形多義語に関する認知的意味対照研究 —日本語の「大・小」と中国語の“大・小”を中心に—
要 旨	
言語学において、多義語はよく見られる現象であり、その異なる意味研究は重要な課題である。認知言語学によれば、多義現象は人間の認知手段を通じて、ある語義の基本義から派生義へ拡張する過程で、人間の認知をカテゴリー化または概念化した結果である。近年、認知言語学の理論に基づいて、多義語を通じて人間の認知過程を研究する方法が目立ち、多義語に関する日中対照研究もますます盛んになっているが、“大・小”と「大・小」に関する全面的な認知的意味研究と日中対照研究は限られている。本論文では、“大・小”と「大・小」を対象として、多義語がどのような意味拡張メカニズムを持つのかという言語認知に関わる問題と、日中同形多義語がどのような意味差異があるのかという文化に関わる問題を考察する。その考察にあたって、本論文では、日中における代表的な辞書とコーパスを主な資料として利用する。 上記の目標のもと、本論文は 3 つの部分で構成される。第 1 は、認知言語学とコーパス言語学に関する理論的枠組みと“大・小”と「大・小」に関する認知的・社会的・文化的意味研究を考察する部分、第 2 は、“大・小”と「大・小」の多義的意味はどのように細分類できるのか、また、再分類された語義がそれぞれどのような関連付けと意味拡張プロセスを有するのかを明らかにしようとする部分、そして第 3 は、それらの多義的意味発展について、認知、文化などの諸要素がどのように組み合わせられることで意味異同が形成されるのかを分析する部分である。本論文はこれら 3 つの部分を中心に、全体で 9 つの章で構成される。以下、章別にその概要を記す。 第 1 章では、本論文の研究背景・目的・対象・方法・意義・構成を述べる。 第 2 章では、本研究に関する理論的背景をなす認知意味論とコーパス言語学を紹介しており、本研究の理論的・方法論的背景になるコーパス基盤と認知意味論の中心的な主張について確認していく。さらに、意味拡張のプロセスを考察する際に依拠する関連概念について確認しており、本研究の理論的立場を以下のように明確にする：(i) コーパス言語学的視点を取り入れている。(ii) 認知言語学的な立場に立つ：(1) 身体的な経験を重視する；(2) プロトタイプ理論に基づく；(3) 拡張関係を比喩によって説明する；(4) 認知主体のストラテジーを解明する。(iii) 意味拡張に対する研究は、共時的な考察と通時的な考察の両方から展開していく。 第 3 章では、多義語、次元形容詞及び日中両言語における“大・小”と「大・小」に関する先行研究を紹介し、それらの貢献点と不足点を指摘したうえで本研究の課題を提示する。特に本章では、先行研究が (i) 主にプロトタイプの意味が未だ不明で、再認定する必要がある点、(ii) 拡張的意味の下位分類は、精緻化する必要がある点、(iii) 拡張プロセス	

を更に明確にする必要がある点、(iv) 各拡張的意味の関連性を詳しく検討する必要がある点、(v) “大・小”と「大・小」の意味に関する日中対照研究は極めて少ない点を指摘している。本章では、以上の問題点を踏まえ、認知言語学とコーパス言語学の視点から、本研究における多義語の認知的意味研究に関する新たな研究の方向性を示す。

第4章では、中国語“大”の多義性分析であり、“大”のプロトタイプの意味と各拡張的意味を認定しながら、各意味の関連付けと意味拡張の認知プロセスの諸相を明らかにする。まず、語源を考察するうえで、中国の代表的な6種の辞典に基づき、“大”の意味項目をまとめる。次に、コーパス言語学の立場にたち、大規模なコーパスから“大”の使用例を収集し、“大”の意味用法を再整理・分類し、「空間、数量、物事の状態、人間の心理、時間、社会的活動」という6つのドメインに分ける。具体的には、空間ドメインは「体積（三次元）、体型、大人・子供、面積・距離（二次元）」に、数量ドメインは「数量、重量と数値・金額」に分ける。物事の状態ドメインは「程度さ、細かいところ、速度、気象、濃度・密度、感覚（視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚）」などの意味に分ける。人間の心理ドメインは「感情、度胸・胆力、性格、心理状態、思考・判断・行為」などの意味に、時間ドメインは「時間の長さ、年上、成長、成熟、成年、未婚、時間の重要性」などの意味に分ける。社会活動ドメインは「社会地位、階級・順序の最上位、家族ランキング、社会規模、正妻、大学の略語」などの意味に分ける。

また、計量言語学の手法を使って、各意味の使用頻度について定量的な分析を行い、各意味を頻度順に配列することを試みる。そのうえで、先行研究を参考としながら、“大”の意味トレース（語源）、辞書における意味記述、コーパスにおける意味解説・使用頻度という3つの観点を組み合わせて、“大”のプロトタイプの意味を定義・認定する。さらに、認知言語学的意味観に依拠し、コーパスによる用例の分析を組み合わせ“大”の意味拡張のプロセスを詳しく分析する。その後、“大”の多義構造を意味ネットワーク図で表し、“大”の各意味項目の意義関連を明らかにする。最後に、“大”の意味拡張プロセス及び意味ネットワークの特徴を分析する（主に意味の拡張起点、拡張方式、拡張メカニズム、拡張の方向性などが含まれる）。本章では、中国語における多義語“大”を例にとり、本研究の多義語の意味分析課題による意味記述の実践を行い、多義語の意味分析モデルを提案する。

第5章では、前の考察結果を受けて、本研究が作成した多義語の意味分析モデルを取り上げ、前章と同じ方法により、中国語“小”の認知的意味を全面的に調査・分析する。主に、プロトタイプの意味の認定、各拡張的意味の再整理・分類、各意味の使用頻度調査、各意味間の関連付け及び意味拡張プロセスの解明、イメージスキーマと意味ネットワークの描画などが含まれる。

第6章では、日本語「大」の多義性分析であり、語源、日本の代表的な辞典とコーパス資料を依拠して、「大」のプロトタイプの意味と各拡張的意味を認定しながら、各意味の関連付けと意味拡張の認知プロセスの諸相を明らかにする。更に、「大」の意味ネットワークを描き出して、「大」の意味拡張の特徴を分析する。

第 7 章では、前章と同じ方法により、日本語「小」の多義性を前述の多義語の意味分析モデルに基づいて分析を詳細に行う。

第 8 章では、対照言語学の立場に立ち、第 4、5、6、7 章での検討を踏まえたうえで、日中同形多義語“大・小”と「大・小」の多義的意味の対照研究を行って、日中同形多義語の意味異同に影響を与える諸要素を検討する。特に、“大・小”と「大・小」の意味差異に焦点を当て、それらの意味差異がどのような原因によって形成されるのかという問題を検討する。

その結果、「大・小」と“大・小”は、「プロトタイプの意味」と「意味ネットワークが放射状である」という二つの点では一致しているが、それ以外の点では相当な差があることが分かった。まず、「再分類の拡張的意味」に関して、本研究では、“大・小”と「大・小」の意味項目をそれぞれ 41、41、33、33 個みつけた。“大”は「大」より 9 つ、「大」は“大”より 1 つ、“小”は「小」より 8 つ多くの意味を持っている。また、「意味拡張プロセス」に関して、“大・小”と「大・小」は空間概念を表す意味から非空間概念を表す意味へ拡張し、各意味間はメタファーリンクとメトニミーリンクによって関連付けられていて、且つメタファーを主とし、メトニミーによって補完されていることが分かったが、“大・小”と「大・小」は、拡張プロセスにおいて「物事の状態、人間の心理、時間、社会活動」という 4 つのドメインに違いが見られる。“大”と「大」に関して、物事の状態・時間・社会活動ドメインにはそれぞれ 3 つ、6 つ、1 つの違いがあり、“小”と「小」に関して、物事の状態・人間の心理・時間・社会活動ドメインにはそれぞれ 2 つ、1 つ、3 つ、2 つの違いがある。さらに、評価性から見ると、中国語の“大”も日本語の「大」もプラスの意味が多いが、日本語の「大」は中国語の“大”よりもマイナスの意味が多い。中国語の“小”も日本語の「小」もマイナス的な意味が多いが、日本語の「小」は中国語の“小”よりマイナス的な意味が少ない。

“大・小”と「大・小」の意味が共通する原因は、主に「字源の一致性」、「日中両国の長い歴史の交流、融合」、「プロトタイプの意味とイメージスキーマの一致性」に関係があるようである。また、“大・小”と「大・小」の意味相違点の主な原因は、「認知の差異」と「文化の差異」にある。「認知の差異」には、主に「五感間の共感覚の違い」と「空間メタファーの違い」がある。例えば、物事の状態ドメインでは、“大・小”は視覚から触覚、聴覚、嗅覚へ拡張できるが、味覚へは拡張しない。一方、「大」は視覚から触覚、聴覚、味覚へ拡張できるが、嗅覚へは拡張しない。「小」は視覚から触覚、聴覚へ拡張できるが、嗅覚と味覚へ拡張しない。「大・小」より“大・小”は空間メタファーを通じて時間ドメインと社会活動ドメインへのマッピング過程において、より多くの空間スキーマを持つ。時間ドメインでは、“大・小”は「前―後」、「遠―近」の認知空間図式を多用している。社会活動ドメインでは、中国語の“大・小”は「前―後」、「上―下」と「中心―周辺」という 3 つを持っているが、日本語の「大・小」はこの 3 つのスキーマを同時に持つことはない。また、「文化の差異」には、中国人が“大”を好み、日本人が「小」を偏愛しているように見える。これらが日中間の美意識、家族意識、距離意識からも反映されている。このこと

から、日中における認知と文化の相違が両言語の意味拡張に重要な影響を与えていると言える。

最後に、第 9 章では、本研究から得た示唆を提示する。主に「中国人の日本語学習者と日本人の中国語学習者が日中同形多義語を習得する指導方法」、「特別な文脈と構文での多義語学習」、「外国語学習者の隠喩能力の養成の重要性」及び「外国語教育への示唆」が含まれる。また、本研究に不足するところ及び残された問題点を整理し、“大・小”と「大・小」に対して発見されていなかったり、見落とされている意味がある可能性がある。“大・小”と「大・小」の意味差異に関する文化的背景に関する研究は、更なる考察が必要である。

論文審査の結果の要旨

氏 名	梅 茹茵
論 文 題 目	日中同形多義語に関する認知的意味対照研究 —日本語の「大・小」と中国語の“大・小”を中心に—
要 旨	
言語学において、多義は普遍的な言語現象であり、多義語の意味研究は重要な研究課題である。興味深い点は、日本語における漢字は、本来的には中国語に由来するものであるが、日本で創出された和製漢語のように、借用した漢字を用いて新たに造語したものもあるということである。日中同形多義語の異なる意味と用法は言語学習と言語教育の重点と難点の一つである。この点から、日中同形多義語研究の大きな意義が認められることになっており、これらの研究は日中言語文化研究に対しても重大な意義を持っている。 近年、認知言語学の理論に基づき、多義語を通じて人間の認知過程を研究する手法が目立っており、認知的な観点から多義語の意味分析を行う研究は確固たる説得力を示している。世界の諸言語を通観すると、「大・小」は殆どの言語に存在し、多用されている代表的な多義語であることが分かる。それらの意味研究は空間概念、認知概念、形容詞の評価性などの研究分野に及んでおり、無論重要な研究課題である。従来の日本語「大・小」と中国語“大・小”の研究では、認知言語学の立場からの全面的な意味分析研究はほとんど行われておらず、「大・小」と“大・小”の日中対照研究も極めて少ない。 本論文は、日中同形多義語に取り入れられた“大・小”と「大・小」を主な対象として、どのような経緯に従って意味拡張されたかという言語認知の面と、それらがどのような原因で意味差異が生じされたのかという言語文化の面に着目して新たな知見を提出しようとするものである。本論文では、日本側の資料と中国側の資料を併用し、近現代の国語辞典に基本点を置き、コーパス資料を主たる対象として考察を加えている。考察の対象としてコーパス資料が選ばれた点には、広い視野から研究を遂行しようとする著者の姿勢が窺われる。本論文の成果として評価されるのは以下の4点である。 (1) 先行研究を踏まえた上で、語源と国語辞書に対する調査・分析に基づき、コーパスによる用例収集を行い、中国語と日本語の国語辞書及び先行研究には見られないいくつかの意味用法を発見したなど、“大・小”と「大・小」の意味研究を補完している点に独創性が認められる。 (2) 多義語の意味記述方法に関して、従来の研究モデルは分析者の主観によって用例を収集し、内省的な分析を行うというトップダウン的な方法であり、コーパス分析による客観的・実証的な研究では不十分である。これに対し本研究では、コーパス言語学、計量言語	

学、認知意味論などに依拠し、多義語の意味記述・分析により妥当で一般性の高い意味分析モデルを提案している点に独創性が認められる。

(3) 従来の研究の大部分は、“大・小”と「大・小」の文字通りの意味分析が中心となり、それらの創造的意味や修辭的意味の分析は全面的・本格的にはなされていない。これに対し、本研究は、“大・小”と「大・小」の修辭的意味の諸相を、認知言語学のスキーマ理論、プロトタイプ理論、カテゴリー理論、概念メタファー理論等の枠組みに基づいて体系的に分析している点に独創性が認められる。具体的には、多義語の意味分析に関して、スキーマ、プロトタイプの意味、各拡張的意味の認定・分類、意味拡張プロセスとメカニズム、意味ネットワークまでの認知的意味分析を試みており、分析に際しての体系性と包括性が認められる。

(4) 対照言語学の視点から、“大・小”と「大・小」の意味異同を明確にしており、“大・小”と「大・小」を例として、より深く日中間の同形多義語の対応関係と非対応関係を探究したことにより、中国人、日本人ともに“大・小”と「大・小」への理解を深めるとともに、日中同形多義語の対照研究に新たな力を注ぎ込んだ。

本研究は、主に共時的な視点からみた“大・小”と「大・小」の意味分析が主眼となっている。通時的な視点からみた日中同形多義語の歴史的な意味変化の考察は今後の課題として残される。また、本研究では、日中同形多義語の意味差異に関しては、言語文化的視点（ないしは比較文化的な視点）からの分析は部分的な考察に留まっており、認知分析をさらに深めることにより、異言語の世界観の違いや文化的発想の違いを明らかにしていくことが可能となる。本研究で得られた知見が、この方面の研究にも重要な貢献をすることが期待される。

以上述べた通り、本研究には多くの新たな知見が認められることから、博士論文に求められる水準を十分満たすものと判断される。本研究を出発点として、著者の今後の研究がさらに進展していくことを期待するものである。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳 衛衛
副査	教授	竹沢 幸一
副査	教授	柿木 重宜

最終審査の結果の要旨

氏 名	梅 茹茵
試 験 科 目	
判 定	合 格 ・ 不 合 格
要 旨	
学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した（2024年7月2日）。 申請者は本研究のための言語学の理論的枠組み（特に認知言語学の理論的枠組み）を十分に体得し、言語現象の分析に適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に対し明確にかつ的確に答えることができた。尚、本論文の研究成果の一部は言語学と言語文化関係の学会誌、紀要、等に掲載、発表され高い評価を得ている。この点においても、本研究は言語学の関連学会における学問的水準に達している。申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し、試験を免除した。 以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳 衛衛
副査	教授	竹沢 幸一
副査	教授	柿木 重宜